

氏名 なか むら 中 村 いさむ 勇 講師



主な研究テーマ

□ 武道の国際普及に関する研究、武道の礼法に関する研究、柔道指導法に関する研究

平成26年度の研究内容とその成果

今回は柔道が海外に普及する初期段階の状況について基礎的な調査を行いました。

柔道が誕生したのが明治15年で、明治26年に外国人入門者を受け入れ始めています。おそらく彼らの一部は帰国後に柔道の普及に関わったと考えられ、例えば最初のロシア人入門者のオシェブコブは帰国後に柔道を教えると同時にこれを基にしたサンボの創始に貢献しています。明治38年にフランスのパリにシャンゼリゼ柔術クラブが誕生し大いににぎわったそうですが、この指導者はフランス人柔術家でした。また同時期に英国で誕生した「武道会」という柔道クラブは柔術や柔道経験がある2名の日本人が関わっています。明治36年には創始者嘉納の高弟が渡米しその後ホワイトハウスの仮設道場でルーズベルト大統領らに指導したことは有名で、これが講道館からの初めての正式派遣とされています。このように海外進出当初の指導者のタイプは(1)日本から帰国した経験者、(2)柔道経験がある現地滞在日本人、(3)正規に派遣された日本人指導者の3パターンがあったと考えら

れます。

明治37、38年ころは日露戦争で勝利した日本が欧米の注目の的となり、特に軍の士官や警察幹部など上流階級の間で柔道が大流行しましたが、この柔道熱は程なくしてさめてしまっています。しかしこれをきっかけに軍や警察で護身術として採用されたり、民間柔道クラブが立ち上がったたりして各地に根を下ろしていったのです。

格闘技である柔道を新天地で展開するためには、まず指導者自身の腕前を披露する必要がありました。そのため、彼らの多くは現地の腕自慢の格闘家達と公開試合をしています。例えば前田光世はアメリカやヨーロッパ大陸で数々の異種格闘技戦を戦い勝利し、名声を博したという記録があります。逆に現地の格闘家に負けたことで普及活動が上手くいかなかったケースもあります。

さて柔道が各地で根ざしていくにつれ新たな問題も発生してきます。それは指導者や指導法の違いによる対立で、例えばフランスでは現地で学びやすいようにアレンジした指導法の採用で普及が進んだのです

が、後にフランス式指導法と講道館式指導法との間でトラブルになりだいたいこじれたようです。こういった問題はこれまであまり取り上げられてきませんでした。研究の余地がありそうです。

国際柔道の黎明期には、講道館からの派遣者、自薦他薦の経験者、どれだけ知識や技量があるか不明な怪しい(?)自称柔道家達が入り乱れて柔道指導をしていました。また教えた内容も柔道だけでなく柔術の技も混在していたようですし、中には出自不明の技も勝手に組み込んでいたかもしれません。こういった混然とした指導内容が統一されていくためには、どこかのタイミングで本家講道館からの指導法に入れ替わっていく必要がありますが、いろんなト

ラブルや困難を経つつもその移行に成功したことが、その後国際柔道連盟の設立とオリンピック種目への採用に繋がったと言えるかもしれません。

これからの研究の展望

これまで柔道の海外普及の資料は講道館サイドの物が中心でしたが、近年海外研究者らによって現地からの新しい資料が発掘されるなど面白い展開になってきています。これからの研究では、従来の国内資料ばかりでなく、海外からの資料を分析することで国際柔道普及の実態を多角的に分析していくつもりでいます。



(写真) 英国ロンドンにある現存最古の海外柔道クラブ「武道会」